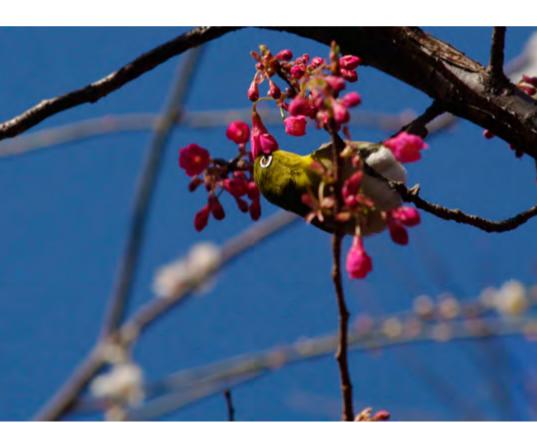
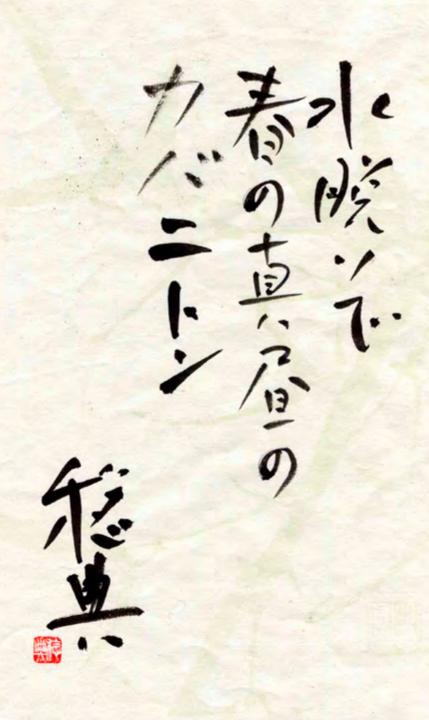
#### まって 2017











#### 柚子風呂

病 炊 冬 繪 あ を 人 れ 飯 0) 點 とふた 以 器 中 後 に 地 を 下よ に 入 出 り 食 7 で り り ほ ゆ ひ き つ そ たる と ぱ < り り 道 な エレベータ た 柚子 に L る 十 二 冬 竹 0) 木 風 夫 影 呂 月 1 人

東京 赤座 典子

#### 初湯

佗

助

に

潜

み

微

か

に

揺

5

す

Ł

0)

去

年

今

年

子

育

稲

荷

0)

巻

子

か

な

刻

ま

ず

に

と

h

h

と

打

芹

薺

気

遣

は

れ

送

5

れ

7

き

し

宝

船

八

割

が

想

S

出

0)

身

を

初

湯

か

な



埼玉 秋 Щ

泉

お正 月

愛 初 犬 夢 0) B L 麗 を 5 男 < 0) 居 子 る と 炬 話 燵 せ か り な

酉 年 に 猫 抱 い 7 往 初 詣

年 屠 蘇 賀 散 状 B 逢 親 Z ح 族 と 0) 輪 Ł な に < 父 五. を み + 年 る

石森 理和

めごと一つ んんこ 宿 ぐ ん る に と < 持 夢 沸 る 5 0) 大 き 越 晦 出 せ る 日 ح り

初

詣

歳

0)

数

打

大

太

鼓

を

さ

な

子

0)

部

屋

中

年

越

は

温

泉

年

新

た

湯

は

Z

あ

5

たま

み

秘

あらたま



雜 詠

山 ふ 健 脚 今 昔 物

語

春 は あ け ぼ 0) た そ が れ は 吾 0) Ł 0)

菜

0)

花

B

遊

ぶ

仔

を

呼

ぶ

親

狸

春

Н

燦

如

月

0)

ず

雜詠

埃

h も ع り 富 岳 7 Þ か 夜 ろ が き あ 桟 け る

王

愛知

岩

雄 万 神 年 万 両 鶏 々 両 新 0) 0) 0) た 紅 初 と 実 を 若  $\exists$ さ 0) 豊 冲 0) か 赤 か 当 々 0) 0) に 赤 た と 活 鶏 B 年 る け 鮮 磨 初 暮 に 々 崖 け 明 れ 仏 り し り る



埼玉

紅梅

紅 太 陽 梅 は B 守 ゆ 護 る 神 0) ゆ ご る と 歩 絵 < 馬 温 照 泉 5 街 す

蕗 0) 薹 香 に 顔 そ む け ル チ ズ

寒

鰤

0)

凍

滝

B

地 銅 球 0) 0) 果 B を う 想 耀 ひ き た る 7

千葉 佳子

聞 と な B け か り 春 ば 初 肝 ょ 小 句 ح 笠 割 会 い 原

笛

0)

音

0)

別

れ

醸

す

B

神

楽

舞

В

型

は

俳

旬

向

き

左

手

に

指

輪

欲

鮟

鱇

0)

吊

L

切

り

春

0)

転

勤

何

処

か

と

小笠原



#### 去年今年

門 柱 に 松 0) 簪 小 晦 日

 $\equiv$ 初 歳 湯 0) 児 7 0) 詠 意 h 気 で 忘 高 < れ 初 7 か る 番 た 旬

内 0) 空 簪 に 給 外 油 す 0) 松 才 0) 明 け

ス

プ

門

柱

松

0)

篠田 純子

### 東京

焼

き

芋

0)

包

0)

新

聞

読

み

耽

る

ア

ジ

サ

1

0)

敗

れ

葉

どっ

ح

V

冬

芽

あ

り

池

0)

面

を

整

え

7

ゆ

Z

鴨

0)

水

脈

聖

夜

奏

ひ

と

つ

間

0)

落

つ

ハンド

ル

祠

ょ

り

猫

飛

び

降

り

来

冬

紅

葉

冬紅葉



寒気団

あ 凍 海 駅 る 伝 坂 た 日 を B か 0) 叱 枯 さ 伽 咤 う 藍 野 す 誰 V 0) が と る 端 失 き 背 < は に な せ 屋 来 懐 L 根 り 炉 冬 0) 見 負 帽 反 子 り ゆ S

埼玉 須賀 敏子

寸

子

屋

0)

蒸

籠

0)

湯

気

寒

気

团

月

女 松 手 ア 白 正 力 過 袋 髪 月 *)* \ ぎ を を ラ 逝 7 脱 咬 ŧ き  $\exists$ ぎ ま シ L 記 7 れ 人 口 *)* \ 0) 賽 7 行 ラ 名 銭 嬉 0) も つ 子 L み ぶ ゐ 0) 獅 と B 7 権 子 な 春 け 隣 り り 現 頭



目

目 数 あ 木 科 珠 犀 を な 展 上 玉 B ど へ 急 げ B 目 れ る 堀 ぐ 礼 ぬ Ш た 濃 を 枯 び を い l 目 目 痩 蟷 7 0) 柿 で 螂 思 ア を と 0) イシ ひ 鵯 び 目 出 越 0) ヤ 0) せ え ド 翔 ず ゥ る 力

田中 藤穂

東京

#### 冬の星

冬 力 氷 新 矍 0) 鑠 年 張 星 あ と 裕 る 0) る あ 子 さん 西 駅 れ 僧 ば 0) 空 裕 0) 鬼 子 大 花 女 さ 指 屋 き め んと呼 先 < 星 に 石 寒 を 水 h 蕗 で 施 上 溢 0) み げ れ 花 る 行



冬芽

若 東 み 向 どり き 発 冬 芽 育 日 0) に 良 映 え き 伸 冬 び 芽 B か か に な

と掌に老が押寄せお正月

膝

 $\exists$ 

は

高

寒

満

月

身

を

切

る

初渚

き風呂を味はふ松の内

風は勢を増す

東京森なほ子

初 朝 海 丁 富 鼠 寧 群 市 士 噛 0) に に に む 見 波 ほ 来 蜜 下 ど た 7 ろ 柑 に さ た ゐ 海 れ 金 み 7 鳴 ゐ 柑 り < 7 嬉 高 子 金 る L ま 5 眼 初 初 遊 れ 3 雀 り 鯛 渚



## | 月作品より (1部 | 月作品

秋川泉・森なほ子・佐藤喜孝

#### 蠟石の丸の中から出ない冬 佐藤

意表を突かれます。言葉は平易でありながら難解 喜孝

定しておられます。 いのではなく、出ないのですね。そんなご自分を肯 な喜孝さんらしい句です。冬の閉そく感、出られな 静かな諦念。蝋石の柔らかな丸

に冬の日差しが………(なほ子)

## 囲まれて写されてをる秋の蝶

森

なほ子

はかなさの中に生命そのものが輝いている一瞬です ラがシャッターチャンスを狙っています。秋の蝶は とても美しい珍しい蝶なのでしょう。多くのカメ

ね。

(泉

カレンダー九月のままに冬日差 森 なほ子

かる三日月さま。芭蕉忌にはそぐはぬと云へる景に、

作者でした。(泉) 季節は過ぎてしまったと、しみじみと感慨にふける レンダーは九月のまま。忙しい日々にもうこんなに 冬の日差しが光るあたたかな部屋でふと見るとカ

## 電線にかかる三日月芭蕉の忌

森

なほ子

時雨忌や林に入れば旅ごころ

芭蕉忌や俳句精進是人間修業 しぐれ忌を山にあそべば鷹の翳 上田五千石 瀧 春

と先人も多く芭蕉忌を機に芭蕉や俳句に思ひを馳せ 日月を眺めんと空を仰ぐ。なんと其処には電線にか てゐる。なほ子さんは芭蕉忌とて風雅の心もちで三 はるかへと眼をやりしぐれ忌を迎ふ 敵機去るけふ時雨忌とおもひつつ 鷹羽狩行 高島

石田波郷

作者のこころが推し量られる。(喜孝)

# 日変わりのコーヒーカップ冬に入る 赤座 典子

が聞こえて来ました。(泉)プだよ」「本当ね、いつもありがとう」という会話味しいわ」「今日のブルーマウンテンに似合いのカッ味しいわ」「今日のブルーマウンテンに似合いのカッ「コーヒー入ったよ」「まあーいいかおり!」「美

## ベランダに林檎の芯待つ冬の鳥

赤座

典子

れるのでしょう。楽しい時が流れます。(泉)いばむ姿に見入っている。何羽も何種類もの鳥が訪林檎の芯を毎朝そっとベランダに置き、鳥たちのつ林檎のでしょう。楽しいのではない。何羽も何種類もの鳥が訪れるのでしょう。

#### 幼子の歩いてみせるクリスマス 赤座

典子

んともかわゆく危ふい。お正月に親戚一同が集まるよちよちと歩き始めたをさな子の歩きっぷりはな

顔が浮かんでくる。今の世は正月もさることながら、なる。「歩いてみせる」で得意げなをさな子と親のと誰かがこのやうな赤ちゃんを連れてきて人気者に

クリスマスである。。

細い急な坂路をよちよちと登ってくるのが見えた」たどたどしく歩くさま。「よちよち歩き」「爺さんが老人、重いものを背負った人などが、小さな歩幅で『日本語オノマトペ辞典』の「よちよち」に幼児、

### 農夫らと焚火を囲む白い犬

秋川

泉

か?<白い>がそれを表しているのかも。(なほ子)いるのですね。それともこの犬は特別なのでしょうて、すっかり人間の一員として焚火の輪に加わってく人間とともにあった犬は、その温かさを知っていユーモラスな光景。動物は火を恐れるのでは?長

よちよちではなくよたよたが適切だ。(喜孝)

(暗夜行路・志賀直哉)とある。 わたしも爺さんだが

#### 声弾む氷を全部割ったよと

石森 理和

の向こうかもしれませんが。(なほ子)
うな赤いほっぺが浮かびます。もしかしたら受話器
氷の句としてユニークですね。お孫さんの満足そ

#### 一箱を一気に拡ぐ蜜柑かな

石森 理和

色と香りでしょう。美味しそうですね。(泉)と拡げたら床は一面蜜柑色。まあーなんて華やかな今届いたばかりの大きな箱をひっくり返してぱっ

### 霜の夜の棒線が消す名のひとつ

井上 石動

じみと寂寥を感じておられる作者です。(なほ子)十二月は皆さんこんな作業をする季節です。しみ

# 大つごもり、高台に彳つ石動さん。「古府中甲府」

見下ろせば古府中甲府除夜の鐘

井上 石動

あった古い地名とか。(喜孝)立句になりさうだ。「古府中」は甲府市街地北部にる。遠い世に思ひを巡らしてゐるのかも知れない。を口にした響きと字面が、殊のほか武張って聞こえ

#### 昼月や大空青く晴れ渡る

王

岩

ちの良い風景です。(泉)み切った景をそのまま詠まれた句ですが、実に気持み切った景をそのまま詠まれた句ですが、実に気持大空が晴れ渡って、そこに昼の月がある。その澄

# カピパラの柚子のお風呂に揺られをり、大日向幸江

温かくなるようなその姿にじっと見ていたくなりまと愛らしく気持ちの良い事でしょう。こちらまでも風呂。カピパラも冬は温まると幸せなのですね。何動物園で見られたのでしょうか。カピパラの柚子

## 拝みたくなるよな夕日暮れの秋

里神楽大黒天の笑皺

黒沢 佳子

篠 田 純 子

るのではないでしょうか。日本人なら。(なほ子) き合うとき無宗教、無神論者でもこんな気持ちにな 本当にそうです。 秋も終わりの真っ赤な夕日に向

#### 暮古月またも齢を重ぬなり

佐藤 恭子

料とスパイスで味が決まるように。(なほ子) たり前の事になってしまいますよね。スープが調味 に味わいと重みを与えています。「十二月」では当 暮古月という語を初めて見ました。この言葉が句

#### トランプと十一月の初雪と

七郎衛門吉保

を詠まれた句。作者と共に誰もが「本当に!」と思 年ぶりの十一月の初雪。 思いもかけぬ米国大統領トランプの誕生。五十四 この異変、この驚きの 今

わず声を上げたくなります。(泉)

様子が伝わります。(泉) 子・長命太鼓などの囃子に、とても楽しい里神楽の 要無形民俗文化財に指定されたとありました。 つけた人が笑顔で舞っているのでしょう。笛・大拍 はどちらでご覧になったのでしょう。大黒天の面を 江戸の里神楽は、 相模流と江戸流に大別され、 作者 重

### みなマスクして信号の停止線

定梶じょう

停止線に全員マスク姿で並んでいる。なんとも奇妙 でユーモアも感じられる情景ですね。(泉) いる季節に信号待ちの交差点。ふと向こうを見ると

輪島の冬はとても寒く、多くの人がマスクをして

## 冬ぬくし内緒へどちらの耳貸さう

定梶じょう

どなたとの内緒話であらうか。わたしは妙齢の方

ゐる。きっとじょうさんも、わたしと同じくお子さ じょうさんは右耳にしやうか、それともと逡巡して しの中の出来事である。(喜孝) んの話し相手になってゐられるのだ。冬の温い日差 とはゆかず孫たちであるが、こそばゆいものである。

#### 月八日白菜を漬け日の暮るる 須賀 敏子

子さんだけの記念日なのでしょうか。(なほ子) ようで面白いです。一月八日って何の日でした?敏 さりげない冬の一日をさりげなく。日付が日記の

#### 冬銀河ちひさくちひさくちひさくなれ 竹内 弘子

が生まれた前後の漱石の私生活や文業を考慮してい 通常の人より小さい人と読まれてゐる。『文人たち ろいろ解説されてゐる。しかもみな「小さき人」を し」がお好きだと記憶してゐる。漱石の句はこの句 弘子さんは漱石の「菫ほどな小さき人に生まれた

の俳句』(坂口昌弘)にはこう書かれてゐる。

小さき人とは、子供という意味ではなく、

漢語の小人であり君子に対応する言葉である。 山に咲くスミレのような人にあこがれていた。 君子のような立派な人ではなく、人知れず野

草〉を連想する。大和路から紀の路へ続く山 路にスミレを発見した漱石もゆかしさを感じ 菫の句は芭蕉の〈山路来て何やらゆかし菫

と少し違ふ考へのあることを知った。 ていたであろう。

ある。(喜孝) ひらがな表記と繰り返し、配慮の行き届いた作品で もっと小さくなれるやうに思へる。「ちいさく」の 弘子さんの句は本歌取りのやうだが、漱石より

### 回復期枯れ葉の窓に爪を塗る

藤穂

風邪よりもちょっと重い病でしょうか、ようやく 田中

お若いです。〈枯れ葉の窓〉が素敵。(なほ子)爪も塗らなくては、と短編小説のよう。藤穂さん、癒えてそろそろ外出もできそう、と華やぐ気持ち。

# 要らぬもの捨てて寒さのつのる午後 田中 藤穂

断捨離なる耳新しい言葉をこのごろ知った。理屈 では分かってゐても、本当に要らぬものなどあるのだ らうかと反論したくなる。わたしの枕元は本とCDが らうかと反論したくなる。わたしの枕元は本とCDが 上成してゐる。俳句関係の本と図書館から借りだし た三文小説だ。CDは戴いたもので、わたしの好み で集めたものではないのだが、そのことがまた楽し い。生涯聴かなかったであらうモーツアルトのバゼッ トホルンの響きなど胸に入みる。三文小説は夜中に目 を覚ました時の考へ事をしないための薬。そんな事を もぞもぞしてゐると昧い内から鳥が遠くで鳴く。起床 もぞもぞしてゐると昧い内から鳥が遠くで鳴く。起床 もぞもぞしてゐると昧い内から鳥が遠くで鳴く。起床 もぞもぞしてゐると昧い内から鳥が遠くで鳴く。起床

「午後」は、心の淋しさを訴へてゐて至言。(喜孝)

## 枯れ枝伐る空と歩道の広さかな 長崎

桂子

ような。スケールの大きな句です。(なほ子)街路樹の枝伐りとわかります。銀杏やプラタナスの空と歩道の広さを言うことにより、大きく育った

# 何も悔やまぬ今日の冬帽子中川句寿夫

は、句だけ遺して逝かれた。も少し早くお知り合ひも何ら力まぬいつもの句寿夫さんである。わたしにら書き写してくれたのであらう。「木の実雨」も「尼ら書き写してくれたのであらう。「木の実雨」も「尼ら書き写してくれたのであらう。「木の実雨」も「尼んではないやうだ。どなたかが句寿夫さんの句帳から書き写してがある。投句用紙の筆跡は句寿夫さ

になりたかった。(喜孝)

みささぎに日当たる柚

子を捥ぎにけ

'n

南

うみ

な

鶴

子

将

夫

眯.

京鹿子 二月号

出

[目な話火鉢をまたぎを

n

鈴

鹿

呂

石

二月号

	く ラ	T								
風土 二月号	さざんかの角まで母に見送らる	馬醉木 二月号	仏の手とどかぬ背ナの煤払ふ	槐 二月号	カリヨンの響きわたれる小春空	雨月 二月号	裸木の扇開きのこころざし	沖 二月号	片栗の花紫に暮れゆける	薄氷や庭にいざなふ心あり
	德田千		高橋		大橋		能村		稲畑廣	稲畑

ホトトギス

二月号

廣 太汀

郎子

一千 玉 夫 泉

#### 研三 年忘れ忘れすぎたるかなしさも睡さうな人を眠らせ炉火守る ともかくも賜杯初場 旅 墨 猿句 年詰る山のうしろの山見えず |を磨る水仙の香を凌ぐほ 島も艦も等しく時 の日の茅の輪くぐって海 の道に学歴要らず 雲の峰 二月号 こだま 団 二月号 一月号 所 実 雨 稀 れ南 勢 け天 ど 0) $\wedge$ n 里 出 7 松 坪 松小 小亀木 朝 林 島田村 内 妻 本 川 良 良 良子 見子

稔

典

力

ライオンの寝顔平たし枯日向 行 < 安立 高 橋 公 道 彦 子

L

らぎく 頭

ふくみそめし 色きまりけ

かな

秋

0) 夕影 日の

n

久保

田

々 々 々

ヤ 大 京 大 郎

枯

思思

S

二月号

二月号 茶の歩幅 真間の井を覗く男に六階のわが窓のぞく

 $\exists$ 

短し

内

海

良景

太章

鶏死す

に隣る眠薬や蛙鳴く かんぽに父と母とを思

が窓のぞく冬の 二月号

蝶

大坪

石に眉引けば仏や寒つ

ば

き

山

 $\square$ 

六

田

廃兵の破れし恋をきく夜か廃兵を父に持ちたる御代の廃日を父に持ちたる御代の雪

ŧ

j

V

々

永

井

荷

風

この春 ひ

竹久

け

り

湯帰りや灯ともしころの雪&色町や真昼しづかに猫の恋 文人たちの俳句 坂口早

文人たちの俳句

昌

弘

万 象

沈めて雪解水 小走る 瀧

芹

の青

春

尚志

落 蟬 0) 地 を 打 つ 7 ゐ る 袂 か な 佐 藤 喜 孝

0) 歩 い 7 2 せ る ク IJ ス マ ス 赤 座 典

子

Ш は 流 る る 枯 野 原 石 森 和 子

井 上 石 動

大日向幸江

歳

末

B

歯

医

者

で

貰

Z

福

引

券

黒

澤

佳

子

昼

月

B

大

空

青

<

晴

れ

渡

る

王

岩

カピパラの柚

子

う お

風

呂に揺られをり

見

下ろせ

ば

古

府

中

甲

府

除

夜

0)

鐘

青

々

と

冬

枯

れ

0)

野

を

包

み

込

む

富

士

0)

Ш

秋

Ш

泉

幼

子

電

線

に

か

か

る

三

日

月

芭

蕉

0)

忌

森

な

ほ

子



吸 殼 を 探 す 火 鉢 B 父 0) 影

宝 絵 を 敷きがさごそと寝返り す 篠 田 純 子

ぬくし内緒へどちらの耳貸さう

冬

定梶じょう

須 賀 敏 子

田 中 藤 穂

要らぬもの捨てて寒さのつのる午後

冬銀河ちひさくちひさくちひさくなれ

竹

内

弘

子

有

り

余

る

落

葉

蹴

散

らし

三

頭

Щ

中川句寿夫

喜孝抄

小

春

日

B

な

ベ

7

安

5

け

き

日

暮

長

崎

桂

子

木

0)

実

雨

板

戸

に

心

張

棒

を

l

7











#### 大日向幸江

受験子の産土神を撫でてゆく 粉雪や赤ちゃん包む産着ごと 浅く握手する手の仄紅く 寒や布巾三枚陽に晒す 芋を半分づつに夫と妻

### 受験子の産土神を撫でてゆく

験子やうぶすなの獅子撫でてゆく」。 土神を撫でる」を、今一つ具体的なものにしたい。「受 焼芋を半分づつに夫と妻 産土神、氏神などは、いわゆる実体のないもの。「産

以前に、半分こしたことを「半分つ」と表(り)現し

は表現が平坦。「芋焼いて半分こづつ夫とふたり」。 たのは幸江さんではなかつたでしょうか、掲句のままで

#### 大寒や布巾三枚陽に晒す

粉雪や赤ちゃん包む産着ごと

佳句です。「寒晴」と言わなかった分深くなった。

「細雪赤ちゃん包む産着かな」。 座五の「産着ごと」。「ごと」は言(りり)わずもがな。

#### 春浅く握手する手の仄紅く

春の手の仄紅し」。 散文の語序。ことばの位置を換えたい。「握手する浅

#### 七郎衛門吉保

三寒と四温のまにまジャム作り 堅餅を切れて目出度し七十五 禽の餌の欲しさの愛想かな 面 過ぎの平林寺道 鏡泳げ ぬ 鳥 羽 静 繕 لح 黙

寒 松

氷

#### 松過ぎの平林寺道静と黙

ありませんが耳には親しい町なのです。せによくお世話になる事務所がありまして、行ったこと新座の野火止にはパソ・コンの故障や不明な点の問合わ言保さんは清瀬のお住まいですから、平林寺は隣町。

理しないのが最上、と。た語を並べたいとも思うのですが難しい、そんな時は無た語を並べたいとも思うのですが難しい、そんな時は違っと「黙」は似たような語ですから、詩句の常識からは違っりを付けたいので、「平林寺道の松過ぎ静と黙」。「静」さて掲句。無論このままでも宜しいのですが、めりは

#### 寒禽の餌の欲しさの愛想かな

くらいに飛躍すべき。かな」は詩になり難い。「餌欲しき寒禽に地震ふりにけり」かな」は詩になり難い。「餌欲しき寒禽に地震ふりにけり」

### 堅餅を切れて目出度し七十五

もとの言い方でした。
現代、「堅餅を」とすることに異を挟むことできない

#### 氷面鏡泳げぬ鳥の羽繕ひ

)、句が弱くなります。「泳げねば鳥羽繕ふ氷面鏡」。 泳げない鳥とその原因の氷面鏡をくっつけて表現す

### 三寒と四温のまにまジャム作り

は「三寒の四温のまにまジャム作り」。佳句です。散文では「三寒と四温の」とするでしょうが、俳句で

#### 田中藤穂

万両や手湯をすすめる若き女医母親似目尻きりりと冬帽子思ひ出に針を合はせて霜夜更く初句会天賞に受くコシヒカリすぐわかる彼の悪筆年賀状すぐわかる彼の悪筆年賀状

#### すぐわかる彼の悪筆年賀状

たら「書きざま」の語もあります。が。「すぐわかる彼の筆癖年賀状」。悪筆を強調したかづが。「すぐわかる彼の筆癖年賀状」。悪筆とまで言わない方

#### 初句会天賞に受くコシヒカリ

しょうが、そこ迄拘らなくてもいい。 これはまた凄い副賞。文法的には「天賞に受くる」で

### 思ひ出に針を合はせて霜夜更く

た方が。 「針を合はせて」が面白い。結句は「霜夜かな」とし

#### 母親似目尻きりりと冬帽子

とりあわせの「冬帽子」が効いています。

#### 赤座典子

バスの旅先頭席の寒茜鴎立つ潜水作業中の幟寒の浜平地行交ふトラクター

#### 阿弥陀堂枯蓮も土も黒光り

蓮の枯れる頃には水も幾分涸れてきます、「土も黒光

り」です。「阿弥陀堂蓮枯れ土も黒光り」。

### 冬灯台の見てゐる未完の防波堤

くわえてあります。掲句は、そんな情景を冷静に表現しとありました。そして「やはり言葉を失う光景」と付け「震災後六年近くになるのにまだまだ何処も工事中で」典子さん。福島県のいわき方面へ旅行なすったという。

### 寒の浜平地行交ふトラクター

たのです。

うてトラクターなり寒の浜」。浜を走らせても宜しいとも「平地」もあまり生きていない。半解を承知で「行交その向うに寒の浜、という景色なんでしょうが、「寒の浜」この情景も同じでしょう。平地をトラクターが行交い、

#### 鴎立つ潜水作業中の幟

思うのです。

よ、との周知のための旗。 幟は潜水作業中」。この海域にいま潜水士が入ってます「鴎」だけでは季語にならないのは俳句の約束。「百合鴎

#### 須賀敏子

初春のひかりの中の実柚子かな福 詣 弁 財 天 で 終 り け り年越ゆる五体くるしむこともなく綿入れの不思議な匂ひ染緋

## 年越ゆる五体くるしむこともなく

るなら「年越ゆる身体髪膚これ無事に」。「五体くるしむ」がややわざとがましい。同じ極端に走

### 初春のひかりの中の実柚子かな

ことをそのまま表現した。
秀句。季重なりであろうと何であろうと、見て感じた

#### 秋川 泉

刃を当つる水餅硬し朝厨雪見舞猫の安否もたずねけり竹刀振る幼な子素足寒稽古酉の市手締めの気勢いまひとつ

### 酉の市手締めの気勢いまひとつ

なき如し」。と思うのですが、ないならないで「酉の市手締めの気勢と思うのですが、ないならないで「酉の市手締めの気勢」真実「気勢がなく」ともあるように表現するのが俳句、

#### 竹刀振る幼な子素足寒稽古

中稽古子の素足」。 「幼な子」と言いたい気持ち分りますが、「竹刀振る寒

### 雪見舞猫の安否もたずねけり

舞」と「猫の安否」を取り合わせて、面白い。何でもない句のようですが、本来係わりのない「雪見

#### 刃を当つる水餅硬し朝厨

りが出る「刃を当てて水餅硬し朝厨」。を当てて」ならここの処で弱い休止が入ります。めりは「刃を当つる水餅」では頭から「水餅」までが一本。「刃

#### 長崎桂子

## 逞しく入組む見上ぐ枯並木

冬芽濃き蔓の勢ひ塀を越ゆ吹き荒ぶ夜は明けたり峰の雪北風や姉さん被り屹度する

#### 逞しく入組む見上ぐ枯並木

ぐ」は不要と思う。「逞しく入組んでゐて並木枯る」。ら「逞しく」かつ「入組んで」いるのです。でも「見上みんなが見逃しがちの景。成るほど、枯れた並木だか

#### 吹き荒ぶ夜は明けたり峰の雪

さ、山の高さ。 あります、あります、そういうこと。晴天の有りがた

#### 冬芽濃き蔓の勢ひ塀を越ゆ

この句の肝心のところですから「塀越ゆる蔓の勢ひ冬芽ことを結句に据えるのは句力を弱めます。冬芽の濃さが蔓が塀を越えること、よくあります。ですから、その

#### 佐藤喜孝

柴垣のへこみてゐたる冬の松一月の砂利屋の砂の濡れし色さまざまに幹かたぶける冬の苑

### さまざまに幹かたぶける冬の苑

いうことがあるんだ、と少し安心したのでした。られない、ことばの選択も凡。喜孝さんでも、あ、こうらっしゃいました。確かに掲句、喜孝さんらしさが感じ電話でお話した時、「句ができなくって」と嘆いてい

### 一月の砂利屋の砂の濡れし色

一月の雨に濡れて。

一月の雨に濡れて。

像だにしなかったのでした。広くない囲いの中の砂礫。
りたいだけあるわけで、これが商売になるなんてこと想
でした。なにしろ砂礫は、我が地では目の前の砂浜にと
でした。なにしろ砂礫は、我が地では目の前の砂浜にと

### 柴垣のへこみてゐたる冬の松

そうなんです、「冬の松」と置く処が喜孝さん。「雨」





## あをキーワード俳句辞典(さいーどぞ)

氏神で三 牛矮鶏 郭公や十歳の吾がそこに居 り七十七歳誕 に頬寄す零歳初ゑくぼ 歳祝ふゆつくりと 生す n

百歳

の看板娘さくら餅

私にも百歳の夢夏ゆくや春の雲百一歳の乗り給ふ 六十歳で嫁入りをする福 家桜三十八歳春 の雨 寿草

けに百四歳や大往生 の叔母の手すさび毛糸帽の八十本のスイトピー

百歳の散歩うやまふ石蕗日和 林檎噛む九十歳の健やかさ

羽衣のやうな五歳 の子二歳違ひ 都市 の姉の手で 9 更 衣

予報より雪多くなり都市悲鳴無音都市遙かに置きて雲の峰 どすん

> 木村茂登子 理敏和子

東堀赤内座 亜 純子 未郎

典子

梅ひらく白加賀玉垣

しだれとぞ

早鎌崎倉 田長篠中崎田 喜久恵 藤穂 桂子 泰江

土足

裕子

土蔵紋昏るるほかなき蝉

許部落

小泉も土足であがる羽抜鶏

須賀 石森 敏理 子和

> 心の中にどすんとすわる東風ふく日 徒然

> > 芝宮須磨子

鎌倉喜久恵

吾も同じ徒然のいち羽春 0) 鴨

ペンキまみれの塗装屋二人年つまる

田

爭

藤穂

ホノルルは春暑しとぞ紅き花 桑の実や早稲田田圃の名残とぞ

吾が生や涯りあるとぞ時計草

土葬

王堀後堀内藤内

一志一 岩郎づ郎

祖父までが土葬の村の雪ばんば 篠  $\mathbb{H}$ 

履き物を脱いでも土足さくら散る 佐 佐 藤

早田竹渡崎中内邉

泰藤江穂

物がたりめきたる土蔵梅雨はげ青葉して一茶の土蔵中暗し初冬や土蔵の中の珈琲店

28

#### 朴魯植俳句集

だり出て牡丹に弱む妓生かなない子に人輪ただある祭かな猫の子を遊ばせに来し世生なるない子に人輪ただある祭かなばらずからい子であるがないましてもないますがり話も飼屋かないまり出ている。

東東大大く灯いたはり弱む枯野な を大大く灯いたはり弱む枯野な を大大く灯いたはり弱む枯野な を大大く灯いたはり弱む枯野な を大大く灯いたはり弱む枯野な を大大く灯いたはり弱む枯野な を大大く灯いたはり弱む枯野な を大大く灯いたはり弱む枯野な を大大く灯いたはり弱む枯野な

2

一道《に人がかるる良夜ななりの山の柔の道は気に東南の屋の木の道はく解省かなりの本の屋の中なる大瀬でなるときに東南の屋の脚省がなりの山の木の道はく解省がなりの山の木の道はくいいのでは、

#### あとがき

内に味が分ってくると思ひます。 でそのまま林檎のやうに丸齧りして下さい。噛んでゐる 熱を加へたり包丁を使ふ必要はありません。調理しない 食べたらよいのか調理法が分からないかも知れません。 賞させて頂きます。稔典先生の句は読み慣れぬと、だう ふことで今月から扉を坪内稔典先生の「カバ十頭」を鑑 りました。カバの句ばかり十句墨書されてゐます。 突然に坪内稔典先生から思ひもかけぬプレゼントがあ

ある月にこのやうな出句がありました。 「あをやぎ句会」には飛び入りで出句する人がゐます。

うしろよりにらむものあり冬の草 目薬の白き痛みの奥に春

この月の高点を取られました。この句はわたしのいた 坂現るる霧の中より舌のごと

ずらで宮沢賢治の短歌を俳句風に改造したもの、本歌は うしろよりにらむものありうしろよりわれらをにら む青きものあり

郵便振替

会費

なつかしきおもひでありぬ目薬のしみたる白き痛み

の奥に

この坂は霧の中よりおほいなる舌のごとくにあらは

気が抜けない楽しみがあるかもしれない、と思ってい も出句したことがあります。選句も鑑賞もいつもより です。この句会では金子兜太先生・岸本尚毅先生の句 にけり

たずらをしてゐます。。

(喜孝)

二〇一七年三月号

電発発 行行 話所日

印刷 ・製本・レイアウト

カット/松村美智子・ティリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

00130-6-55526 一〇〇〇〇円 乱丁・落丁お取替えします。 (送料共) (あを発行所)

